

Nord-Est

日本フランス語フランス文学会東北支部会報 第5号

目次

- 【ディスカッション報告】 p.1.
弘前大学フランス語ホームページの試み
《Place de la Francophonie》 <http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/french/>
熊野真規子 工藤貴子 Mathieu CAUQUELIN
- 【論文】 p.16.
歴史を反映する声・社会的言説について
—ランボー「民主主義」におけるポリフォニー—
深井陽介
論文レジュメ p.29.
- 編集後記 p.30.
投稿規定 p.31.

日本フランス語フランス文学会 東北支部

2012

ディスカッション報告

弘前大学フランス語ホームページの試み

《Place de la Francophonie》 <http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/french/>

熊野真規子

本稿を含む以下の三稿は、2011 年度東北支部大会におけるディスカッション:「フランス語教育におけるホームページ活用—弘前大学フランス語ホームページの例—」の報告である。なお、支部大会から原稿執筆までにもホームページのバージョンアップがあったため、2012 年 1 月現在の報告とする。

1. はじめに

弘前大学では、21 世紀教育（一般教育）の多言語コミュニケーション実習の枠組みでフランス語Ⅰ（教員 1 名による週 2 回、半期 30 回、2 単位）、フランス語ⅡA（フランス語Ⅰの続き、週 1 回、半期 15 回、1 単位）、フランス語ⅡB（ⅡA と並行して履修することを勧めている仏検受験、会話などの目的別クラス：週 1 回、半期 15 回、1 単位）フランス語Ⅲ（フランス語ⅡA の続き）の授業を行っている。全クラス統一の総合教材タイプの教科書を使用しているため、文法の進度は遅く、従来の初級文法を終えるにはフランス語Ⅲまで履修を継続する必要があるが、卒業に必要な単位は、フランス語Ⅰの 2 単位でみたされる。フランス語Ⅱ、フランス語Ⅲへの継続履修者をいかに増やすかが、フランス語教育担当者の課題である。

一般教育以外のフランス語としては、人文学部で開講されているフランス語実習ⅠA～ⅢA（2 年次前期～3 年次前期：週 1 回）、ⅠB～ⅢB（ネイティブによる週 2 回の集中タイプの授業：2 年次前期～3 年次前期）があり、一般教育のフランス語Ⅱの履修を終えた学生が対象である。フランス語実習は、人文学部の欧米文化コース、国際社会コース、思想文芸コースの選択必修科目になっている。従来のフランス語学科やフランス文学科のような専門性はないが、姉妹提携校のボルドー大学等への留学希望を持つ学生の多くは、留学前にフランス語実習を履修している。（フランス語カリキュラム解説は、HP に掲載）

2. HP 立ち上げまでの経緯

2007 年前期末に初級学習者（フランス語 I 履修者）を対象に行ったアンケート調査の結果，学生の興味・学習継続への思いと，時間割編成など制度的な問題との齟齬が明らかになった（アンケート集計結果の詳細は，HP を参照）．学習を継続するための履修システムが不十分である点を補い，自律学習への誘いとモチベーションの維持，フランス語 II，III への継続的履修を促すことなどを目的にフランス語部会（専任および非常勤のフランス語教育担当者）で企画したのが，フランス語 HP 《Place de la Francophonie》である．

全学学生を対象とする企画であり，英語に偏重する弘前大学のカリキュラムへの多言語学習推進の意図もあるため，全学サーバー上に他の言語と共にサイトを立ち上げる働きかけをしたが同意を得られず，結果的に人文学部サーバー上にディレクトリを申請することになった経緯がある．そのため，ホームページの存在をどのように広報するかが，立ち上げ以来の課題となっている．

立ち上げにあたっては，《Place de la Francophonie》が，在校生，卒業生，留学生，大学以外にフランス語を学ぶ場がなくなってしまった地域のフランス語学習者，弘前大学以外の地元大学のフランス語学習者の交流の場，フランス語を通じて相互的に刺激を与えあえる広場へと成長することを一つの理念とし，2008 年 1 月からコンテンツ，原稿依頼などの準備を開始，HP 立ち上げなどに詳しい学生の協力を得て，日仏交流 150 周年にあたる 2008 年 4 月 1 日の公開にこぎつけた．

3. HP の構成

2012 年 1 月末現在での HP 構成の大枠を以下に簡単に紹介する．

・ **Accueil**（トップページ） >

Annonces / お知らせ

ピックアップ French Bloom Net

ピックアップ欧州委員会ニュース

・ **Avenue des Informations** /告知板 >

"フランス語でつながる"(東日本大震災)

更新履歴

ようこそフランコフォニー広場へ

ピックアップ記事過去ログ

フランス語カリキュラムについて

仏検（実用フランス語技能検定試験）について

フランス語：制度・システムに関するアンケート集計報告 2007

フランス語ホームページに関するアンケート集計報告 2010

• **Square des Interviews /インタビュー** >

インタビュー@国際交流センター（2008）

留学生インタビュー（2010）

留学生インタビュー（2011）

• **Espace Francophone/ フランス語の世界** >

フランス語の世界へようこそ！

フランス語スタッフ

フランス語スタッフ・リレーコラム

ナタリー河岸¹：パリ在住の元・留学生ナタリーによる連載エッセイ

モンペリエ直送便：卒業生による「化学とフランス」の連載エッセイ

“電書”鳩通り：学生メッセージ（留学経験者，卒業生／在學生による寄稿）

ボルドー直送便：ボルドー第3大学留学中の弘大生による写真と短文のルポ

弘前直送便²：ボルドー直送便の弘前版

Cercle Francophone：HPのオフ会的活動の報告

Facebook ページ（リンク）：2011 年末公開開始

Twitter（リンク）：2011 年 2 月試運転開始

イベント紹介／報告コーナー

• **Point-Rencontre Hirosaki / 弘前&ふらんすねっと** >

留学生コラム³：弘前大学への留学生によるコラム

弘前ふらんす事情

ふらんこふいりー：地域のフランス語学習者による寄稿

• **Liens/リンク集**

¹ 日本語訳は人文学部フランス語実習受講生

² 寄稿者は人文学部フランス語実習 AI-AII クラス受講生

³ 日本語訳は人文学部フランス語実習受講生，現在は Cercle Francophone による

4. HP のあゆみ

2012 年 1 月末現在までの HP のあゆみ、教育的模索を、以下に簡単に紹介する。

- ・2008 年 10 月 ピックアップ French Bloom Net, ピックアップ欧州委員会ニュース→毎週更新にこぎつける
- ・2009 年 3 月 「ナタリー河岸」新設
- ・2009 年 7 月 Cercle Francophone 立ち上げ(読書会)
- ・2010 年 4 月 HP 改良のためのアンケート(1 年生対象)
- ・2010 年 8 月 学生による更新作業のグループ化
- ・2010 年 9 月 「ボルドー直送便」新設
- ・2010 年 10 月 Cercle Francophone 活動リニューアルと“活動報告”新設
- ・2011 年 2 月 Twitter 試運転
- ・2011 年 5 月 「弘前直送便」新設
- ・2011 年 7 月 第 1 回まちなかフランス語サークル
- ・2011 年 9 月 「モンペリエ直送便」新設
- ・2011 年 12 月 Facebook ページ公開

Cercle Francophone と HP 更新作業のグループ化については次節で、「ナタリー河岸」、「弘前直送便」については第 6 節で解説する。

5. 自律的学びへの支援:学生参加による HP 更新および Cercle Francophone

2009 年 7 月に自律的な学びと社会人学習者との交流をめざして HP のオフ会の形で立ち上げた Cercle Francophone は、漫画『神の雫』のフランス語翻訳版の読書会でスタートした。社会人との交流は、時間帯の設定の関係で実現せず、留学生との交流を通じてフランス語翻訳の問題点をディスカッションするなど活性化も見られたが、活動の中心メンバーの卒業や留学、交流していた留学生の帰国とともに活動は急に休止状態に陥った。また、留学生からは『神の雫』は難しすぎるのではないかという指摘も受けた。

学生の自律性の向上、留学意欲の向上など、成果のきざしにつながったと思われるのが、2010 年 8 月の更新作業のしくみの変更、2010 年 9 月にはじまったボルドー留学中の弘大生による「ボルドー直送便」、2010 年 10 月から会話と交流中心に活動をリニューアルした Cercle Francophone とその「活動報告」のコーナーの新設である。

更新作業は、それまで HP 作成経験のある卒業生または在校生 1 名がアルバイトとして行い、ノウハウの引き継ぎが行われてきたが、作業報告のメールにもほとんどリアクションを受けられない孤独な作業である点が問題であった。そこで改善策として、2010 年前期を担当した 3 年生が留学のため引き継ぎをすることになった際、グループ体制を試行することにした。

フランス語 I のクラスを通じて募った 6 名が候補になり、全員がフランス語と更新作業両方に興味を抱いていることがわかったことから、交替で更新作業にあたり、その日の更新作業に直接関わらない学生も、技術的に助け合えるようにかたわらで Cercle Francophone の活動、HP のリニューアルなどを検討してもらうことになった。更新作業そのものがサークル的な活気を帯びた反面、とりわけ学休期間は他人任せになる傾向が強くなるという問題は、今後も課題である。

2010 年 9 月に新設された「ボルドー直送便」は、アンケートで好評を得た留学体験記をより身近でホットなものにし、もっと体験記を読みたいという要望に応えるべく、更新作業にかかわっていた学生のボルドー大学への留学を機に投稿を依頼し、スタートした。幸い、同期にボルドーへ留学した 5 名全員の協力を得て、原則として 2 週間に一度のペースで更新され、HP 開設当初にフランス語教員が期待していた学生による HP の活性化に一步シフトすることができた。現在留学中の 5 名にも引き継がれている。

2010 年 10 月からの Cercle Francophone 活動リニューアル（会話と交流中心の活動へ）は、英語圏への留学から帰国した元フランス語実習履修生から、会話と交流中心のフランス語サークルを立ち上げたいというタイムリーな相談を受けたことをきっかけに行われた。軌道に乗れば社会人の francophone との交流にも拡大することを視野に入れ、学生主導で活性化することが決まった。活動リニューアル当初、活動を盛り上げるために更新作業グループに積極的な参加を呼びかけたことによって、HP 活性化のために Cercle Francophone 活動報告を新設する事にもなり、活動のたびに活動報告が更新されるようになった。2011 年末からは、活動と活動告知／活動報告との時差を解消するため、Facebook ページも活用しはじめた。

Cercle Francophone の活動がある程度定着したのを受けて、2011 年 7 月には社会人のフランス語学習者との交流をめざし、第 1 回まちなかフランス語サークルを試行した。その後「まちなか」で 1 回、学食での Atelier de Michael

(ボルドーからの留学生 Michael のボランティアによる授業形式の活動)に、社会人が参加するなどの交流がみられている。

学生には試験・レポートなど多忙な時期、帰省やアルバイトなどで不在になる学休期間などがあり、他方、社会人には放課後など参加できる時間帯に限りがあると同時にある程度コンスタントにフランス語を学びたいという欲求があるため、両者の学び合いの場を調整して提供することは容易ではない。しかし、活動そのものは学生にとって刺激があるように見受けられるため、Facebook ページの活用拡大などでさらに交流を活発化する余地はあるだろう。

6. 人文学部授業での活用：「ナタリー河岸」から「弘前直送便」へ

パリ在住の元・留学生ナタリーによる連載エッセイ「ナタリー河岸」は、フランス語実習 I A 履修生に取り組んでもらう翻訳の題材として依頼し、スタートした。HP 開設時は、親近感を感じるだろうと考え、ボルドー大学などからの留学生によるエッセイの翻訳をフランス語実習履修生に取り組んでもらったが、執筆者によって文体が懲りすぎたり、執筆依頼に快諾しつつも寄稿を得られないこと数知れず、授業で扱う題材にするには問題が感じられたためである。ナタリーは日本語教育にたずさわっていることもあって教育的配慮に理解を示し、原則として毎月の寄稿に協力してくれたが、エッセイの内容は、結果的には、フランス語実習 I 履修生のレベルには難しいものであった。

そこで、現在の学生のモチベーションを向上させるには、むしろ「発信型」の課題の方が向いているのではないかと考えをあらため、2011年4月より試行したのが「ボルドー直送便」の弘前版ともいえる「弘前直送便」の企画である。投稿を授業課題とする半期の試行を経て、後期は非常勤の CAUQUELIN 講師にバトンタッチしたが(詳細は CAUQUELIN 講師より報告)、ある程度の教育的効果が感じられたので、今年度の分析、彼の提案などを取り入れた形で来年度も授業に取り入れる予定である。

フランス語実習では、ほかにも [Meilleurs Prénoms.com](http://Meilleurs.Prenoms.com) や [Aujourd'hui le Japon](http://Aujourd'hui.le.Japon) などのリンク集も授業で活用している。教員からの働きかけがなければ忘れられがちな HP は、学生が自ずと見たくなる魅力的な HP に作りあげていく工夫も不可欠であるが、授業課題や Cercle Francophone の活動を通じて関わりを増やしていくことも現在の学生には必要であるように思われる。

7. おわりに

HP は開設からようやく 4 年ほどが経過したばかりで、その成果を確実視できるデータはもちえない。HP の運営は、立ち上げ当初イメージしていたほど簡単なものでもなく、全学生に教育的効果を期待することも難しい。

しかし、モチベーション維持の一助（開設初年度から履修継続学生の増加）、授業への活用（人文学部学生によるフランス語コラムの日本語訳やフランス語による発信）、Cercle Francophone の活性化（参加者のフランス語学習意欲・留学意欲の向上、フランス人のみならずフランス語を学習した他国の留学生との交流の活発化）、社会人学習者・留学帰国者への情報提供、ボルドーへの留学生の発信の場などの一定の成果をあげることができ、2010 年度半ばのブレイク・スルーを経て、ようやく開設時にイメージしていたスタート地点に立てたのではないかと感じている。後退したわけではないし、HP や Cercle Francophone がなかったよりはあった方がよかったに違いない。

時代とともに社会も学生も刻々と変化する以上、一度開設した HP はたゆみないバージョンアップが宿命になる。動向をとらえ、ニーズや成果を検証し、それをフィードバックするシステムに組み込まれてしまうことは「面倒な」ことである。が、実はそのことがもっとも大きな教育的意味なのではないか、と気づかせてもくれるのである。

2012 年度は、Facebook ページや Twitter の充実⁴と活用拡大に加え、Cercle Francophone 活動の多様化、授業（フランス語 I）との連動の工夫などで、一歩前進できないかと考えている。

(弘前大学)

⁴ 非常勤の工藤貴子講師の協力が加わった 2011 年末からの Twitter は、HP アンケートの要望を参考にツイート数を増し、ツイート内容も、今日のひとことフランス語、クイズ、フランス（語）関連情報など、アンケートの提案を意識して内容を多様化し充実をはかったところ、学休期間にもフォロワーやリプライが少しずつ増加している。

HPを使った人文学部以外の学生への働きかけ

工藤貴子

1. はじめに

弘前大学では、卒業に必要な初習外国語の単位は前期の2単位で満たされる。このような履修システムのもと、ボルドー第三大学との交換留学が可能になったことで毎年複数名の留学生を送り出している人文学部の学生ですら、後期の継続履修を決めかねているのが現状である。したがって、他学部の履修生においてはなおさらのこと、強力なフランス語に対する動機づけが求められる。

そこで、「自律学習への誘い」と「モチベーションの維持」を目的としてスタートしたHPがよりオープンな、つまりフランス語に最も近い人文学部生のみならず、全学部の履修生がフランス(語)にいつでも気軽に触れられる拠り所となるよう、さまざまなコンテンツを用意し、また随時新設することによって改善を重ねている。以下に、その代表的なコーナー「“電書”鳩通り」「モンペリエ直送便」「仏検について」を紹介する。

2. “電書”鳩通り

「“電書”鳩通り」は、HP開設当初から設けられているコーナーで、卒業生や在校生がおもに留学体験記を寄稿している。メールでのやりとりで原稿を集めてネット上にあげているということから、フランス語スタッフのアイディアによって“伝書”ではなく“電書”と表記している。

専門科目でフランス語を学べる人文学部生に特化したものではなく、全学部生を対象にするというHPのコンセプトにのっとり、寄稿者の出身学部にも配慮し、まずは人文学部3名、教育学部1名、理工学部1名、農学生命学部1名に原稿を依頼し、どの学部生が読んでも参考になるような形でスタートさせた。その後も寄稿が増え、現在は8人の体験記が読めるようになっている。ただし、医学部生については専門に移ると校舎も違うため、後期の継続履修者はほとんどなく、したがって寄稿者も現段階ではゼロである。

また、内容も留学体験記だけでなく、フランス語を始めたきっかけや勉強法、そして短期間のフランス旅行記などもそろえ、バリエーションに富むような工

夫をしている。

たとえば、執筆当時、理工学部大学院に在籍しつつフランスに1年間の留学をした学生には、専門外であるがゆえにどのような工夫をしてフランス語を学び続けたかを、留学生活とあわせて書いてもらった¹。彼女は留学前、専門の授業の合間を縫って人文学部のフランス語実習を履修している。自ら担当教師に交渉したという彼女のこの積極性を、昨今の指示待ち傾向の学生に大いに学んでほしいと考えたためである。

また、パリ旅行の写真を提供しつつ、フランス語に魅了された経緯を書いた学生もいる。自分に留学経験がないという理由から執筆を躊躇した学生だが、「遠い存在」「英語よりも難しい」²と多くの人を感じるであろうフランス語に、そのかけらを街中に発見することを繰り返しながらハマってゆく楽しさを、若者らしく素直な、みずみずしい文体で表現してくれた。留学という高い志を得ずともフランス語は履修する価値がある、もともと関心のあるテーマをフランス語によって再構築し、広げることができるという喜びを示した、短いが雄弁なエッセイとなった。詳細は下記の注2に示す投稿文を参照されたい。

実際、2010年に行ったHPに関する学生アンケートの自由記述欄では、この旅行記に対して特に女子学生の好意的な感想が数多く寄せられた。こういった学生の反応は、フランス語に対する従来とは異なるアプローチの可能性を顕著に示すものである。すなわち、EUの盟主たるフランス、プルーストを生んだフランス、5月革命のフランスをさしあたっては脇に置き、フランス語に対するささやかな楽しみや小さな希望を拾い集めることによってフランス(語)に対するモチベーションが高まっていくことを、もはや排除してはならない時代にさしかかっていることを物語っていよう。

同アンケートで回答を得た人気の記事を集計した結果、この「“電書”鳩通り」が圧倒的に高い支持を得ていることがわかった³。また、筆者の担当した2クラス分の回答を個別に分析したところ、自分が所属する学部の卒業生(または在校生)の記事の一節を引用するなどして、より強いシンパシーを感じていることを示す回答が多く見受けられた。自分が学んでいるフランス語という道はどこ

1 「フランス留学!!」<“電書”鳩通り><Espace Francophone

2 「フランス語のススメ」<“電書”鳩通り><Espace Francophone

3 「フランス語ホームページに関するアンケート集計報告 2010」<Avenue des Informations

につながり、その先にどんな人生があり、どんなフランス語の生かし方があるのか。それを具体的にイメージさせ、モチベーションを維持させるために、“先輩”という身近なロールモデルの存在は欠かせないものであることをここで強調しておきたい。また、それを示すための場がこの「“電書”鳩通り」であり、それゆえの高い評価であることがうかがえる。

3. モンペリエ直送便

本学において、唯一フランス語を専門で学べるのは人文学部の学生のみであるため、姉妹校の協定を結ぶボルドー第三大学に留学するのは、おのずと人文学部生が大半という現状がある。こういった事情から、HP は理系学部生向けの記事が少ないこともまた事実であった。実際、「“電書”鳩通り」の寄稿者 8 名のうち、理系学部(理工・農学生命・医)出身者は 3 名にとどまる。

このような現状を指摘し、協力を申し出てくれた学生の“理系学部出身者による理系学部生のための”新しいコーナーが、2011 年 9 月にスタートした。それが「モンペリエ直送便」である。2. で紹介した「“電書”鳩通り」のためにフランス語を始めた動機やその魅力について原稿を寄せてくれ、HP 開設当初から協力を惜しまなかった農学部(現・農学生命科学部)卒業生が、月一回の原稿執筆を担当してくれている。

この学生は本学農学部(当時)の大学院修士課程を修了して 1 年間の社会人経験を積んだ後、モンペリエ第二大学博士課程への入学を果たした。その際、自ら担当教授にメールを送り、入学に必要な書類をそろえ、住居にいたるまでのなにもかもを自分で手続きして渡仏したバイタリティーあふれる青年である。その後、博士号を無事取得して 3 年間の留学生生活を終え、現在は台湾で研究生生活を続けている。コーナーのタイトルに「モンペリエ」を使用するのは、モンペリエでの研究生生活を通じて得た知識や実感を綴るという彼の意向に沿ったものである。むろん、ボルドー大学留学生が現地の生活を発信するコーナーのタイトル名「ボルドー直送便」にならっている。2012 年 1 月の時点で、連載は第 5 回を数える。

第 1 回のタイトルは「“Maison de la Chimie(化学会館)”に行こう」である。パリ 7 区にあり、化学系の学術会議の会場となっているこの施設は、化学を志す者なら凱旋門よりエッフェル塔よりまず先に訪れるべき聖地であると紹介している。また、その外観は「まるで宮殿のような歴史的建造物、内部はまるで

ルーブル博物館のよう」⁴であると述べ、化学好きでなくとも興味をそそられる。そのマニアックさから、書店にあまた並ぶお決まりの観光地を勧めるガイドブックや、グルメ・ファッション・ライフスタイルを軽やかに謳ういわゆる“パリ本”とは一線を画した、ほかにはないパリガイドとなった。

第2回は「フランス語と化学用語」。日本語と英語共通の用語 DNA はフランス語では ADN ということ，“薄層クロマトグラフィー”は日本語、英語ともに TLC の略語で示されるが、フランス語では CCM とまったく別のアルファベットで示すことなど、決して市販のテキストには載らない、しかし理系学生には必須のフランス語が紹介されている。仏文科卒業の筆者には毛頭教えることのできないフランス語であることは言うまでもない。

また、第3, 4回は 留学中に知り合ったフランス人化学者たちとの交流エピソードを紹介する「シミスト(Chimistes)」, そして第5回はフランスの研究機関の複雑さについて、毎回興味深いエッセイが届いている。

農学部出身である彼の「“電書”鳩通り」のエッセイは、やはり農学生命科学部の在学生にすでに多く読まれ、その魅力を語りあったり、まだ読んでいない学生に勧めたりする光景が教室で見受けられたほどの高評価である。また、HP のオフ会のような形で始まったフランス語サークルに、現在のところ理工学部や農学生命科学部の学生が参加していることもふまえて、この新設の「モンペリエ直送便」も同様に、理系学部のフランス語履修生にさらなる刺激を与えることを期待している。

4. 仏検について

本学は 2008 年度秋季より、文部科学省後援実用フランス語技能検定試験(以下、「仏検」)の一般会場となった。後期開講の 21 世紀教育フランス語 II B の授業でも「仏検対策クラス」を設け、検定試験を通したフランス語のレベルアップを推奨している。

この授業の履修者数がさほど多くない中、どういうわけか人文学部以外の学生が多くを占め、その比率は全体の約 70%にのぼっている。この現象の背景については推測の域を出ないが、人文学部生がフランス語をコミュニケーションツールとしてとらえる結果、会話クラスへの登録が多いのに対して、他学部生は自分のフランス語能力を証明するものを形として、つまり資格として残した

4 「“Maison de la Chimie(化学会館)”に行こう」<モンペリエ直送便> Espace Francophone

いと考える傾向があるものと思われる。実際に「仏検対策クラス」の履修生に受講動機を尋ねると、「自分のフランス語を客観的に示すために仏検は必要だと思った」という声がよく挙がる。

このように、カリキュラムの一環として仏検対策クラスを設けている以上、その教育的効果ないしは成果を学内外に示すための場としてもHPは活用されており、過去4年間の合格率、平均得点を公表している⁵。また、サイドバー内に「仏検(実用フランス語技能検定試験)について」というコンテンツを示し、ここで毎回の試験日程や実施級などの要項、また仏検の実施報告などもフランス語スタッフが随時行っている。

この授業が終わり、それぞれの学部に移って専門科目を学ぶようになってからも、自分でさらに上の級を受験する意欲的な学生が最近では増えている。中には4年生になり、就職もすべて決まった後に「フランス語が懐かしい、もう一度勉強しなおしたい」と言って相談に来る学生もいる。人文学部生はすでに専門科目で面識のある同学部のフランス語スタッフから情報を得ることができるが、他学部の学生にとっては敷居が高いと感じられる側面もあろう。また、2011年度秋季仏検を控えて、学外の、つまり地域の社会人学習者からHPのツイッターを介して仏検の実施級に関する問い合わせを受けたことがあった。今後はHP開設の原点である「自律学習の誘い」と「モチベーションの維持」を改めて意識し、本学学生のみならず、卒業生、そして地域のフランス語学習者がいつでも仏検情報を得るための場として活用できるよう、HPの存在をアピールしていく必要がある。

5. おわりに

いつでもフランスのTVニュースがネットでみられ、フランスの音楽が動画サイトで聴け、学習サイトを使ってフランス語をブラッシュアップできるようになるとは想像だにしない、20年前はそんな時代であった。いま、我々は望み、検索するだけで簡単にフランス語にアクセスすることができる。

しかしながらどんなにネットが発達し、進化したとしても、最も重要なことは、フランス語を続けたいくなるような、フランスについてさらに深く知りたいと学生に思わせるような、魅力的な授業をすることであろう。もともとフラン

⁵ 「仏検対応クラスの4年間を振り返る」<仏検(実用フランス語技能検定試験)について
<Avenue des Informations

ス語に対して高いモチベーションを持つ学生は例外として、初習外国語としてなにげなくフランス語を選んだ学生が楽しい、もっと学びたいと感じるきっかけは、ネットではなく今でも教室にこそあるはずで、またそうあるべきである。かつて自分が師事した諸先生方のように、フランス(語)について語る自分がはたして学生の目に楽しそうに映っているか、その問いかけをしながら教室に向かうことがフランス語に人をひきつける最大の手段になる、このことは言うまでもない。

だが、一方で弘前には大都市のようにフランス語学校がなく、本学でも仏文科の火はもはや絶えて、ない。黙っていても語学学校の看板が目に入り、黙っていてもフランス語仲間が周りに大勢いるような環境ではないところで、ではどうしたらフランス語に対するモチベーションを持ち続けられるか。継続して学ぶ気にさせるためには何が求められているのだろうか。

それはロールモデルである。しかも、手の届きそうな身近なロールモデルである。辞書を半年間で壊すほどの猛勉強を重ねてようやく追いつくような、歴史に名を刻むロールモデルではなく、手を伸ばせば届きそうなお手本としての存在である。弘前という同じ地方都市で、弘前大学という自分と同じ環境で、フランス語に対する自分と同じ体温でスタートしたはずの上級生が、いまはフランス語を通して「新しい自分」という景色を見て楽しんでいる。それを提示することによって、在學生にはフランス語との関わり方に具体的なヴィジョンや夢が生まれ、フランス語を学ぶ意義が芽生えるのではないだろうか。同じ条件下でフランス語をモノにした人をまず目指し、同じ目的を持った人と切磋琢磨する、そういった交流の場を提供することがこの HP の一つの役割である。彼らがブレイクスルーして、フランス語に対して自らアクションを起こせるようになるまでサポートする、その後もいつでも戻ってきてフランス語の魅力を語りあえる場として機能する。それが《Place de la Francophonie》という広場の存在意義ととらえ、今後も管理、維持の行き届いた場にしていかなければならない。

(弘前大学非常勤)

「弘前直送便」のフランス語教育への活用

Mathieu CAUQUELIN

1. はじめに

弘前大学人文学部で開講されているフランス語実習 IA と IIA の履修生は、毎週、「弘前直送便」というコーナーのために投稿することになっている。その学生は初級者であるから、当然、完璧で自然なフランス語を書くことは難しいと思われる。学生の誤りには一定の特徴があるように見受けられる。そこで、次の章では、学生がどのような誤りをよくするかについてまとめることにする。

2. 学生が誤りがちなフランス語のミス

学生は「弘前直送便」の作文で自分の知っているフランス語の表現よりも難しい文章に挑戦することが多い。学生は日本語では自由にさまざまなことを表現できる反面、フランス語の運用能力は未熟であり、表現したいことと、表現できることとのレベルにギャップがあるからである。それが多数の誤りにつながると思われる。学生が自分のフランス語能力のレベルを把握することによって、このような誤りも減少すると考えられる。

文法事項に関連する誤りには、複数の(s), あるいはアクセントを付けることを忘れる誤りがある。日本語では、表現をするときに複数を意識することがない。むしろ、名詞の性の一致も誤りやすい点と予測できるが、この点は辞書、あるいは電子辞書を見ながら作文をすることで学生は解決できるようである。複数の(s)を忘れないようにするには、フランス語の文法知識を定着する必要がある。

アクセントに関して、フランス人は一般的に音の違いによってアクセントをつける必要があるかどうかを区別する。一方、日本人（特に初級者）にはフランス語の母音の違いがとても聞き取りにくいようである。フランス語は日本語に比べて母音の数が多いため、学生はアクセントをつけることを忘れると考えられる。

先ほど述べた誤りを減少し、あるいはもっと自然なフランス語を目指すには、指導をするうえでいくつかの工夫をする必要がある。次のような改良案を挙げることができる。

3. 「弘前直送便」に関する提案

「弘前直送便」をより効果的に活用するために、これまでの「弘前直送便」と違って、

フランス語の文章を日本語の文章よりも先に書くことを提案した。

その提案を行うことによって、メリットが二つ現れる。

第一に、学生がフランス語の文章を書く際にできるだけ直接フランス語で考えるようになることである。そうすることによって、学生は自分のレベルに合った文章を書くことになると考えられる。具体的には、辞書で調べた単語だけでなく、学生が授業で勉強した表現も使用することになる。

第二に、フランス語の文章が日本語よりも先に書いてあると、読者はフランス語に着目するようになることである。ウェブにアップした文章を読む読者の多くが日本人である。日本語を母国語としている読者は、先に目に入る文章が日本語であれば、フランス語の文章ではなく、日本語の文章を読むのが必然である。それであるからこそ、日本語の文章より先にフランス語の文章を書く必要があると考えられる。

4. 「弘前直送便」の学生への効果

教員が学生の作文を個別に添削することによって、学生一人一人に対応した誤りを指摘したり、より自然なフランス語を説明したりすることができる。

「弘前直送便」での課題は、授業での課題に比べて、自分が興味のある自由なテーマを選ぶことができる。更に場合によっては、授業で扱わないような軽いテーマを選ぶことができるので、学生はより楽しく作文を書いているようである。

学生が授業で見せるフランス語能力の実力と、「弘前直送便」の作文のレベルは、ほぼ一致しているが、外部の人に見られることを意識することで、学生全体のフランス語能力のレベルアップに繋がると考えられる。

フランス語の言語としての目的は、考えもしくは出来事を伝えることである。「弘前直送便」を通して学生たちが、フランス語の言語としての目的の達成を実感することができたと思われる。「弘前直送便」では、学生が、自分で言葉を選んでフランス語で表現する。そのことによって、フランス語は学生にとっての単なる授業の科目ではなく、「言語」となる。

(弘前大学非常勤)

論文

歴史を反映する声・社会的言説について —ランボー「民主主義」におけるポリフォニー—

深井陽介

1. ポリフォニーの4つのかたち

ランボーの詩作品や散文作品を読んでいると、しばしば一貫性がなく、あたかも異なる人間から発せられた複数の声が、同一のテキストの中に混在しているような印象を受ける。たとえば、詩人の代表作である『地獄の季節』においては、「私」の複数化が促進され、異質なディスクールが混ざり合い断絶を繰り返しながら、混沌たる世界が構築されていく。ランボー自ら「精神の戦い」*« combat spirituel¹ »*と呼ぶこの自己の葛藤は、『地獄の季節』に顕著に見られる「私」のアイデンティティと関わる問題である。しかしながら、実はこのテキスト内に現れる複数の声、ディスクールの異質性にはいくつかのレベルがあり、それぞれ分けて考える必要がある。著者は現在までこのランボーに極めて特徴的な性質を「ポリフォニー（多声性）」と呼び考察してきた²が、これまでの分析からランボーのポリフォニーには以下の4つのレベルが存在するように思われる。

- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1 主体「私」が持つ複数の声 | ミクロ（テキスト内部の問題） |
| 2 テキスト引用論と関わる複数のテキスト | ↓ |
| 3 複数の文学ジャンルの混在 | ↓ |
| 4 当時の社会的風潮を反映する人民の声 | マクロ（テキストとその外部の問題） |

まず、ポリフォニーの1番小さなレベルは先ほど述べた『地獄の季節』に顕著で、同一人物の発話であってもそこには複数の視点や複数の責任主体が存在するというものである。これはランボーによく見られる悩み・葛藤や自分自身

¹*Œuvres complètes*, édition établie par André Guyaux, avec la collaboration d'Aurélia Cervoni, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2009, p. 280. 以下、ランボー作品からの引用はこの版を用いるものとし、略号「*O.C.*」とページ数を用いて表す。

² 詳しくは FUKAI Yosuke, *La Polyphonie de Rimbaud*, Thèse de doctorat, Paris IV Sorbonne, 2011. (『ランボーの多声性』, パリ第4大学博士論文)を参照されたい。

を嘲弄すること、それに皮肉などに関わり、しばしばディスクールを一貫性のない不安定なものにしている。ポリフォニーの第2のレベルはテキスト引用論と関わる。これは、ランボーがあるテキスト内において、自身が過去に書いたテキストを引用する自己引用（autocitation）や他者のテキストを引用することで生まれるポリフォニーである。例えば『地獄の季節』の「錯乱Ⅰ」において、ランボーは散文のなかに前年（1872年）の韻文詩を複数引用していき、詩のアンソロジーに自ら解説を加えるような形式を用いている。また、当時の文学テキストの他、様々な書物を引用する場合がしばしばある。特に聖書や教理問答などキリスト教と関わるテキストはランボーのエクリチュールと深く関わり、単なる引用だけではなくオリジナルのテキストを歪曲するパロディーもしばしば行われる。ただ参照元のテキストは我々日本人はもとより、現代を生きるフランス人にも馴染みがないものが含まれており、読解を困難にする一因となっている。第3のポリフォニーは、文学ジャンルと関わる。ランボーは韻文と散文を混合することはもとより、日記や自伝、それにおとぎ話のような形式など、複数の文学ジャンルを混在させることがしばしばある。ランボーのテキストはなかなか一つの文学ジャンルに絞り込むことができない。たとえば、「自分の人生を語る」ことを目的とする文字通りの自伝なのか、自伝的フィクションなのかなかなか決定できず、しばしば研究者の間で問題になる。最後の第4のポリフォニーは最もマクロなレベルでのポリフォニーで、テキストが当時の時代の風潮を反映するディスクールを含んでいるということである。これは、特定のテキストを引用することとは異なり、当時の社会性や時代性と関わる不特定多数の「声」や匿名の「声」がランボーのテキストの中に存在するということを意味している。ランボーが生きた時代は第二帝政・普仏戦争・パリコミュン・共和制成立と激動の時代であり、国外に目を向けても、帝国主義・植民地支配が積極的に推し進められた時代であった。思想面でも科学信奉主義や進歩思想などがしばしば唱えられた。ランボーはしばしば社会的風潮、歴史的文脈を反映する「声」を使って、当時の世相をテキストの中に浮かび上がらせている。

このように、ランボーのテキストにあたかも異質で複数のディスクールが存在するように見える際、これまでに挙げた4つの種類があると考えられる。即ち、発話のポリフォニー・テキスト引用論と関わるポリフォニー・複数の文学ジャンルによるポリフォニー、そしてランボーが生きた時代を反映する社会的

ディスクールが織り成すポリフォニーである。

2. 社会的ディスクールの反映する詩「民主主義」

本論文では第4のポリフォニー、即ち時代の風潮を反映する声がテキスト内に介入するポリフォニーについて論じたい。『地獄の季節』は、語り手「私」のアイデンティティーに関わるテキストである為、「私」自身が葛藤し、分裂するようなディスクールが展開されるが、その後の『イリュミナシオン』では「私」の存在がだんだん希薄になっていく。「幼年期」「生活」「青春」など自伝的タイトルを冠する詩篇で語られる内容も、もはや一個人の人生からかけ離れて、夢想的・虚構的になっていくか、あるいは詩で語られるスケールが拡大していき普遍性を志向するようになる。その他の詩篇では、「私」という主語が登場しない、あるいは人称代名詞自体が出てこない詩が増え、個人的感情の吐露を超越するニュートラルな詩が展開されていく。このような『イリュミナシオン』詩篇の中にあって「私」の声を介在させず、積極的に他者の声を借用しながら社会や歴史を批判する詩が存在する。「民主主義」という題名をもつ短い詩である。先行研究では、『イリュミナシオン』の政治性については今まであまり扱われて来ず、散文詩・自由詩といった形式面での特徴を分析することに重点が置かれてきた。しかし、「民主主義」は一読して、当時の歴史や政治観あるいは社会との関係が明らかであり、テキストを解釈する上でこの問題は無視できないことがわかる。それでは、この詩を通して、ランボーはいかなる方法を用いて、自らの見解を表明しているのだろうか？

Démocratie

« Le drapeau va au paysage immonde, et notre patois étouffe le tambour.

« Aux centres nous alimenterons la plus cynique prostitution. Nous massacrerons les révoltes logiques.

« Aux pays poivrés et détrempés ! — au service des plus monstrueuses exploitations industrielles ou militaires.

« Au revoir ici, n'importe où. Conscrits du bon vouloir, nous aurons la philosophie féroce ; ignorants pour la science, roués pour le confort ; la

crevaison pour le monde qui va. C'est la vraie marche. En avant,
route³ ! »

民主主義

「旗は汚らわしい風景へと向い、我々のお国訛りは太鼓の音を掻き消す。

「中心街ではこの上なく破廉恥な売春を蔓延らせてやろう。理にかなった反抗など皆殺しにしてやろう。

「胡椒が植えられた、水浸しの国々へ！一産業上のあるいは軍事的な、極悪非道な開拓の任務の為に

「ここで、いやどこでもまた会おう。熱意ある新米兵士である俺たちは獐猛な哲学を身につけるだろう。科学には全くの無知で、快適さの追求にはしたたかで。こんな世界などくたばっちまえ。これこそ本当の前進だ。前へ進め！」

この詩は特異な形式を有している。一目見て明らかなことは二重鍵カッコにはじまり、二重鍵カッコで終わっているということである。このカッコ（ギュメ）にはどういう意味があるのだろうか？アンドレ・ギュイヨーは、当時、二重鍵カッコは「他者のテキストを引用する」ためにしか使用されなかった、と述べている。

Les dictionnaires contemporains de Rimbaud, Littré, Bescherelle et les premières éditions du Larousse ne présentent qu'une définition des guillemets : leur fonction est d'encadrer une citation, une parole rapportée⁴.

³ « *O.C.* », p. 314. この作品は自筆原稿がない為、ギュイヨーが指摘するように、引用符の付し方をめぐって、初出『ラ・ヴォーグ』誌の編集者の独断が含まれる可能性も完全には否定できないが、ほとんどの版・研究書では引用符を重要な分析対象と見なしている。

⁴ André Guyaux, « Mystères et clartés du guillemet rimbaldien », *Parade sauvage*, 8, Musée-Bibliothèque Rimbaud, 1991, p.26.

ランボーの時代の辞書、リトレやベシュレル、それにラルースの初版などはギュメにただ一つの定義しか与えていない。即ち引用文、伝達された言葉を囲む機能である。

ランボーのテキストではこの二重鍵カッコ(ギュメ)がしばしば使用される。例えば、『地獄の季節』の冒頭は二重鍵カッコで始まるが、これは最後まで閉じられないことがない。また、「錯乱 I」という詩では語り手である「地獄の夫」が冒頭で道連れである「狂った処女」を召喚し、語る権利を彼女に譲り渡した上で自分のことを長々と語らせる。その際「狂った処女」はしばしば「地獄の夫」が過去に述べた言葉を引用するが、その際ギュメが頻繁に使用されている。

それでは、「民主主義」においてギュメはどのような機能を果たすのだろうか。この詩には4つの段落が存在し、それぞれがギュメから始まっている。引用は最後に一度閉じられているだけなので、同一の主体(ここでは「私たち」« nous »)が4つのことを言ったことになる。こうして、テキストは全て引用された「声」から成り立っていることがわかる。次に文体に注目すると、各段落が徐々に長くなっていくことが確認できる。第4段落は最も長く、「新米兵士」と規定される「我々」の「声」は息の長いものになる。また、これら4段落は音の上でも共通点を有している。第1段落では動詞 « aller » の活用形 « va » の後に定冠詞の縮約形 « au » が来るが、続く第2～4段落の文頭で、この定冠詞縮約形 « au » または « aux » が登場する。第3段落および第4段落で出てくる感嘆符も相まって、詩は集団が同調して徐々にボルテージを上げていくアジテーションの様相を呈する。また、この詩では動詞が合計7回登場するが、そのうちの4つが現在形で書かれ、残りの3つが単純未来で書かれていることが解る。こうして、ランボーは特定できない匿名の、しかも民衆の「声」を使って、現在から未来に行われうる行為を述べさせるのである。

次に内容について考えてみよう。一読してこの詩は奇異な印象を与える。というのも、題名の「民主主義」と本文の内容が合致していないからである。まずは題名の「民主主義」の意味を確認しておこう。リトレ大辞典を参照すると以下のように定義されている。

démocratie (dé·mo·kra·sie), s. f.

*Gouvernement où le peuple exerce la souveraineté. (Ce fut un assez beau spectacle dans le siècle passé de voir les efforts impuissants des Anglais pour établir parmi eux la démocratie, MONTESQ. Esp. III, 3.)

*Société libre et surtout égalitaire où l'élément populaire a l'influence prépondérante.

*État de société qui exclut toute aristocratie constituée, mais non la monarchie. On dit en ce sens : la France est une démocratie.

*Régime politique dans lequel on favorise ou prétend favoriser les intérêts des masses. La démocratie impériale à Rome.

単語 « démocratie » の « démo » はもともと「民衆」 « peuple » を意味し、デモクラシーは「民衆主導の政治」や「民衆が支配的な影響力をもつ自由で平等な社会」を意味する。しかし内容を読んでもこの詩は「民主主義」のことを言っているのではない。むしろ、当時盛んに行われた帝国主義に基づく海外侵略や植民地支配、あるいは軍事および産業政策などについて語られている。

しかも各段落を注意深く読んでいくと、ただ一つの主題のみが語られているわけではない。スティーブ・マーフィーはここで構成させている言葉の多声性が「民主主義」の意味を解りにくくさせていると述べている⁵。実際、4つのパラグラフでは共通して植民地支配の為に外国に向っていくイメージがあるが、それぞれ語っている内容が微妙に異なる。

まず第1パラグラフでは「侵略」について語られる。「Le drapeau va au paysage immonde」という表現からも解るように「旗」を掲げた艦船が未開の大地へと向うイメージが与えられている。「notre patois」「お国訛り」とはここでは支配する側であるヨーロッパの兵士たちの訛りを示すだろうが、彼らの侵略によって「民族音楽」の太鼓の音 (« tambour ») がかき消されてしまう。「tambour」という単語は既に『地獄の季節』の「悪しき血筋」にも出てくる。それは「飢え、渇き、太鼓、ダンスダンスダンスダンス」« Cris, tambour, danse, danse, danse, danse⁶ ! » という表現に見られるが、これが白人によって征服される「黒人」の文化を象徴していたように、「民主主義」における「太鼓」もまた植民地の文化を象徴するものと考えられる。

⁵ Steve Murphy, *Stratégies de Rimbaud*, Honoré Champion, 2004 ; édition revue, corrigée et augmentée, 2009, p. 504.

⁶ « O.C. », p. 251.

次の第2パラグラフでは街の中での「性産業」や「犯罪」について語られている。「*Aux centres nous alimenterons la plus cynique prostitution.*」 「中心街ではこの上なく破廉恥な売春を蔓延らせてやろう」では大量の兵士たちが植民地になだれ込むことで、市街地で性産業や暴力行為が増大することを示している。「*Nous massacrerons les révoltes logiques.*」 「理にかなった反抗など皆殺しにしてやろう」では、侵略の結果当然起こるであろう現地民の正当な根拠を持つ反対をも鎮圧してしまうことを意味するだろう。

さらに第3パラグラフを見てみよう。ここでは植民地における経済活動や軍事権益の拡張のことが述べられているように思われる。「*Aux pays poivrés et détrempés !*」 「胡椒が植えられた水浸しになった国」の「胡椒」はインド南部の原産であり、これもまた植民地を想起させる。「*détrempés*」という形容詞は「水に浸された」という意味があるが、これもまた熱帯雨林・あるいはサバナ気候特有の激しい降雨によって大地が水浸しになった状態を表現していると考えられる。尚、フランスは第二帝政時代、ナポレオン3世がサイゴンを首府とするコーチシナを直轄植民地とし、カンボジアも保護国として組み入れており、恐らく東南アジアからインドにかけての地方が想定されているだろう。次の「*au service des plus monstrueuses exploitations industrielles ou militaires*」 「産業上のあるいは軍事的な、極悪非道な開拓の任務の為に」という表現には、植民地政策の要となる搾取に基づく資源の確保、産業の拡大と軍事権益の拡張政策が伺える。ここで言う「*service*」とは恐らく「*services militaires*」で用いられる意味であり「国家的な任務」という意味で理解するのが適切だろう。

最後の第4パラグラフはどうだろうか。ここでは「哲学」や「科学」という言葉が登場し「これこそ本当の前進だ。前へ進め！」 「*C'est la vraie marche. En avant, route !*」 などという表現も相まって、「花について詩人に語られたこと」など、ランボーの初期韻文詩でも登場したような、科学や進歩思想などが想起されている。この段落は重要な情報を与えてくれる。つまり、今までディスクールを発していた主体「*nous*」の正体が初めて明かされるのである。「*Conscrits du bon vouloir*」 「熱意ある新米兵士」という表現からも明らかのように、植民地支配を実行する兵士たちが直接的な発話主体ということになる。

ここまで、「民主主義」という詩が「私たち」という主体の4つのディスクールに分割されている様を検討してきた。まず、最初の3段落では「侵略」→

「統治」→「反乱の制圧」→「経済的・軍事的搾取」という植民地支配，帝国主義に基づく一連の行為を手順を追って示している。そして，最終段落でそれら一連の行為の根本にある思想を表明してディスクールを締めくくっていると考えられる。「熱意ある新米兵士である俺たちは獰猛な哲学を身につけるだろう。科学には全くの無知で，快適さの追求にはしたたかだ。こんな世界などくたばっちまえ。これこそ本当の前進だ。前へ進め！」という言葉には，進歩思想を利用しつつ自己の快樂や快適さのみを追求しようとする一般市民の思想が象徴的に表現されているだろう。

3. ランボーの視点はどこにあるのか？

それではランボーの視点はこの詩のどこにあるのだろうか？この問題を解決する為にまずは先行研究を見てみよう。

André Guyaux considère les guillemets comme un élément qui ne permet pas d'assimiler le contenu de ce discours à la perspective de Rimbaud ; pour Jacques Plessen, les guillemets permettraient au contraire de deviner le point de vue du poète, en tant que marques ou plutôt marqueurs de l'ironie, signifiant la « distance » entre ce discours et celui que tiendrait Rimbaud⁷.

アンドレ・ギュイヨーはギュメをその中にあるディスクールの中身をランボーの観点と同じものとして扱うことを許容しないものと見なしている。ジャック・プレッセンにとってギュメは逆に，ディスクールとランボー自身のディスクールの中に「距離」があることを意味する皮肉の印，あるいは標識として詩人の視点を見抜くことを容認するものである。

スティーブ・マーフィーはアンドレ・ギュイヨーとジャック・プレッセンの考察を挙げながら，前者ではギュメをランボーの自身の観点とは同一ではないことを示すものとして紹介し，後者ではランボーがアイロニーを用いる際の目印のようなものとして紹介している。しかしながら，ギュイヨーの論文を読んでもみると，ギュメがアイロニックな意味として使用されていることを否定して

⁷ Steve Murphy, *Stratégies de Rimbaud*, op.cit.,p. 505.

いるわけではないということが解る。

Rimbaud préfère donner aux guillemets un sens ironique, qui renvoie à l'autre pour le détacher de soi. Aucun guillemet rimbaldien ne valorise le personnage ou l'auteur cité, Verlaine, Cassagnac ou Coppée, et les guillemets de « cher corps », comme à ceux dont Nietzsche affuble « la Vérité » pour jeter le doute sur elle, font un effet de distance. Prévus pour inclure une parole autre, les guillemets rimbaldiens finissent par l'exclure. C'est leur sens moderne⁸.

ランボーはギュメに皮肉な意味を与えることを好み、それは自己から切り離されて他者に向けられる。ランボーが用いるいかなるギュメも、カサニャックなどの登場人物やヴェルレーヌ、コペなど引用された作家に高い価値を与えるものではなく、ニーチェが真実に疑いを投げかけるために「真実」という風につけるギュメのように、「愛しき体」のギュメは距離の効果を生む。他のことばを内包する為に用意されたランボーのギュメは、結局その言葉を排除してしまう。それがギュメに与えられた近代的な意味なのである。

ギュイヨールはランボーの使用するギュメの持つ意味について言及し、単なる引用符としての意味に皮肉の意味を付け加えたことで、ギュメに新しい「近代的な」意味合いを付与したと結論付けている。これらの先行研究から言えることは、鍵括弧内の言葉はランボー自身の見解とはかけ離れており、皮肉の意味を込めて引用されているということだろう。

それではランボーの視点はどこにあるのだろうか。それはまず、「民主主義」という題名にあると考えられる。「民主主義」という政治の一つのあり方の中心を担う「人民」に含まれる「兵士たち」が実際とる行動は、帝国主義に基づく植民地支配である。支配される方の人民には当然民主主義などというものは与えられず、搾取・支配を強要されることになる。海外における権益を求めて侵略をすることが、結局は「民主主義」とは程遠い世界を生んでしまう。進歩を信じて前に進むことが、結果的に他民族の生活を脅かし、その自由を奪ってしまうのである。このようなイメージは『地獄の季節』のなかの「悪しき血筋」

⁸ André Guyaux, « Mystères et clartés du guillemet rimbaldien », art. cit., p. 33.

の中にも見られる。白人たちが上陸してくることによって、自分たちの生活が変えられてしまう「民族」、話者によって「劣等種族」と呼ばれる民のイメージである。

Les blancs débarquent. Le canon ! Il faut se soumettre au baptême, s'habiller, travailler⁹.

白人たちが上陸する。大砲だ！洗礼に従い、服を着て働かなければならない。

この詩の中でランボーの視点はまず題名に存在し、題名と内容にギャップを生み出すことによって「民主主義」を揶揄していると言える。題名とテキストとの関係性を簡潔に図式化すると以下のようなになる。

<table border="1"> <tr> <td>題名 = 民主主義</td> </tr> <tr> <td>ランボーの視点</td> </tr> <tr> <td>アイロニック</td> </tr> </table>	題名 = 民主主義	ランボーの視点	アイロニック	←ギャップ→ ↓ 民衆の扇動を 増長	<table border="1"> <tr> <td colspan="2">本文の内容 = 帝国主義・植民地支配</td> </tr> <tr> <td colspan="2">社会的風潮を現す匿名の言説を引用</td> </tr> <tr> <td>パラグラフ 1</td> <td>侵略</td> </tr> <tr> <td>パラグラフ 2</td> <td>統治・暴力・犯罪</td> </tr> <tr> <td>パラグラフ 3</td> <td>経済・軍事</td> </tr> <tr> <td>パラグラフ 4</td> <td>哲学・科学・当時の思想・イデオロギー</td> </tr> </table>	本文の内容 = 帝国主義・植民地支配		社会的風潮を現す匿名の言説を引用		パラグラフ 1	侵略	パラグラフ 2	統治・暴力・犯罪	パラグラフ 3	経済・軍事	パラグラフ 4	哲学・科学・当時の思想・イデオロギー
題名 = 民主主義																	
ランボーの視点																	
アイロニック																	
本文の内容 = 帝国主義・植民地支配																	
社会的風潮を現す匿名の言説を引用																	
パラグラフ 1	侵略																
パラグラフ 2	統治・暴力・犯罪																
パラグラフ 3	経済・軍事																
パラグラフ 4	哲学・科学・当時の思想・イデオロギー																

しかしながら、ランボーの視点が反映しているのはタイトルのみではない。実は、ギュメで囲まれた引用文の内部にも、ランボーの皮肉的な視点が含まれているように思われる。それは、「cynique」「monstrueuse」「(philosophie) féroce」「logique」「ignorants」「roués」などの形容詞である。これらは、民衆・兵士らが発する言説とは若干異質であり、むしろ彼らの行動を冷静に、皮肉的に捉えているものと捉えることができる。実際、ランボーが複数の視点を介在させ、ポリフォニーを実現しようとするとき、しばしば誇張を伴う形容詞や感嘆符が用いられる。例えば『地獄の季節』の「錯乱 I」は「狂った処女」の声の引用から成り立っているが、そこでは形容詞が頻繁に用いられ、誇張さ

⁹ « O.C. », p. 251.

れることによって、発話者を悲劇のヒロインに仕立て上げてしまうような劇化の手法が用いられている。

Ô divin Époux, mon Seigneur, ne refusez pas la confession de la plus triste de vos servantes. Je suis perdue. Je suis soûle. Je suis impure. Quelle vie!

おお、神なる夫よ、主よ、あなたの下女のなかで最も悲しい女の告白を拒まないでください。私は自分を見失っているのです。酔っ払っているのです。みだらなのです。なんという人生でしょう！

ランボーが誇張的な表現を頻繁に用いる場合、しばしばディスクールを人為的・人工的にした上で、皮肉の意味を込めることがある。「民主主義」で頻繁に用いられている形容詞もまた、ディスクール内部にランボーの皮肉的な視点を介在させる印のようなものとして存在し、植民地支配に向って前進する民衆の視点とは別の視点を付け加えている。結果、題名だけではなく、引用された4つの段落内部でも皮肉が浮き彫りになり、兵士の視点とランボーの視点の差異がより鮮明になる。こうして、ランボーは民衆に属する「新米兵士」たちの言説を誇張的に紹介しながら、植民地支配・帝国主義の様々な側面をあらわにしていき、それを「民主主義」と呼ぶことによって、時代の風潮に対して皮肉・揶揄を込めているのである。

それでは、当時の民主主義批判はランボーに特有のものなのであろうか？実は、民主主義を批判的に捉えたのはランボーが初めてではなく、以前から批判の対象となっていた。例えばトクヴィル (Alexis de Toqueville, 1805-1859) のように、民主主義の政治・制度が市民社会の思想に及ぼす影響について考えた政治思想家は既に存在した。彼は、知識のない多数者が権力を掌握することによって、結果的に暴政を招き衆愚政治に陥りかねないと民主主義の現実を批判している¹⁰。また、ヴィクトル・ユゴーは、民衆の瞬発的に表出されるエネルギーを懸念し、「一文無しで、理念もなく、徳もない人々¹¹」によって政治が

¹⁰ 『アメリカの民主政治』 (*De la démocratie en Amérique*, 1835, 1840)においてトクヴィルは、民主主義を多数派による専制政治とみなし、大衆世論の腐敗・混乱を解決するには知識人の存在が重要であると述べている。

¹¹ Alfred Barbou, *Victor Hugo et son temps*, G. Charpentier, 1881, p.221.

行われることを認めなかった。

しかし、ランボオの「民主主義」に於いて重要なのは、民主主義を批判することそのものにあるのではない。むしろその方法が重要なのである。ここでは、詩人が政治あるいは社会の現状に対して、直接的に意見を表明しているのではない。そうではなく、他者の声を借用していわば「参照もとのわかりにくいパロディー」を作り上げ、民衆の立場から見た当時の風潮・時代性を表現しているのである。こうして、詩は単に文学的な目的のみを有するものではなく、社会や政治と強く結びつく。しかも、政治の中心部や権力者に注目するのではなく、むしろデモクラシーを形成している民衆・群衆がクローズアップされるのである。『地獄の季節』の「悪しき血筋」の話し手は、この民衆・群衆について「劣等種族が一切合切を覆い尽くした一世に言うところの民衆、理性、国民そして科学だ」*« La race inférieure a tout couvert – le peuple, comme on dit, la raison : la nation et la science¹² »*と述べ、科学や進歩に対する不信感を表明している。

4. 結論

結論として、ランボオは「民主主義」において他者の声を積極的に導入しようとしていることがわかる。それは、文章を具体的に一字一句引用しているわけでもなければ、参照元が明らかな書物について言及しているわけでもない。ここで借用されているのはむしろ当時の社会の世相を反映する匿名の声である。こうして、ランボオの詩学は美文を用いて情感を表現する叙情的な文学や、高踏派に見られるような、俗世間を拒絶するような至高の芸術としての文学からかけ離れていき、痛烈な皮肉を伴う社会性を獲得していく。そして「私」の叙情を中心に語る詩を否定しそれを乗り越えるという意味で、詩は普遍性や世界性を獲得して行くのである。本論文では「民主主義」のみを扱ったため、『イルミネーション』のもつ特性を網羅的に明らかにしたわけではない。実際、『イルミネーション』のテーマはとらえどころがなく、自伝的な詩や、おとぎ話のような構造を持つ詩も存在する。しかし、その中に「都市」をテーマとした詩が複数存在することを忘れてはならないだろう。ここでもまた、パリあるいはロンドンなどの大都市が持つ社会性が色濃く反映されている。その際ランボオはしばしば一市民を登場させて、その人物から見た都市を語らせる。このように、

¹² *« O.C. », p. 248.*

詩人は当時の社会的ディスコースを積極的に導入することによって、ロマン派の抒情詩にみられるような私情を詩から引き剥がすだけでなく、そこに歴史性・社会性・政治性を与えていく。複数の「声」を体現する詩的言語は、こうして普遍的世界を表象するものになるのである。

(東北大学非常勤講師)

論文レジュメ

Des voix historiques et le discours social

- La polyphonie dans « Démocratie » de Rimbaud -

En lisant « Démocratie », nous remarquons immédiatement la particularité de sa forme : les quatre citations sont encadrées de guillemets. Elles lancent des slogans militaires qui évoquent le colonialisme. Il s'agit d'un discours social. En effet, le texte est difficile à comprendre sans le contexte historique : il est indissociable de l'idéologie de l'époque de Rimbaud.

Dans le premier paragraphe, le « nous » parle de l'invasion impérialiste et de la contamination de la culture par la langue : « notre patois étouffe le tambour ». Le deuxième paragraphe représente la domination après l'invasion : « Nous massacrerons les révoltes logiques. » Il s'agit donc de la corruption des mœurs et des crimes qui impliquent l'invasion. Le troisième paragraphe repose sur le commerce et les affaires militaires, des activités proprement coloniales. Enfin, le dernier paragraphe parle de la « philosophie » et de la « science ». Il traite donc une question globale et idéologique. Ainsi, le « nous » n'est plus le représentant d'une pensée simple, mais un moteur qui énonce différents aspects de la politique sous la Troisième République. C'est ainsi que ce discours d'un « nous » anonyme reflète la tendance générale et l'opinion publique de l'époque de Rimbaud.

Ce poème fondé sur les guillemets construit une altérité radicale. La citation devient de plus en plus globale et universelle en accumulant différents aspects politiques et sociaux. « Démocratie » n'est qu'une citation des autres. Rimbaud se distancie de ce discours. En outre, la segmentation et le parallélisme du texte accélèrent la construction polyphonique. En empruntant des voix de l'autre ou des autres, Rimbaud présente paradoxalement sa propre poésie. Il réalise la polyphonie discursive, fondée sur des voix contemporaines mais anonymes.

Yosuke FUKAI

Chargé de cours à l'Université du Tohoku

編集後記

日本フランス語フランス文学会東北支部会報第5号をお届けいたします。今号の内容は、2011年11月12日に弘前大学で開催された東北支部大会でのディスカッションと研究発表にもとづいております。査読を経て掲載された深井氏の論文は長年の研鑽による力作です。また、ディスカッションでは、ホームページを活用したフランス語教育の実際が紹介され、豊かな示唆を得る機会となりました。報告をお寄せくださった皆さまにあつく御礼申し上げます。

2011年3月の東日本大震災から一年が経ちました。「復興」はいまだ道遠しの感がありますが、生かされてある者として、今を大切にしつつ、東北の被災地に幸福な未来が開かれていくことを願うばかりです。被災された方々に改めてお見舞いを申し上げますと共に、皆さまのご健康を心よりお祈り申し上げます。

会員の皆さま、そして、このHP版をご覧くださった読者の皆さまには、今後とも本誌へのご支援、ご協力のほど、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

(T. I.)

投稿規定

1. 日本フランス語フランス文学会東北支部会員は、この雑誌に投稿することができる。他に、編集委員会が認めた場合は会員以外からの投稿も受理する場合がある。
2. 投稿希望者は、原則として東北支部大会で口頭発表の後、これをもとにした原稿を投稿するものとする。ただし、編集委員会が認めた場合は研究発表を経ない原稿の投稿も受理する場合がある。
3. 投稿希望者は、事前に支部事務局に連絡し、執筆要項を受領し、それに沿って原稿を作成する。
4. 講演原稿、シンポジウム報告、書評など、論文以外の投稿も受け付ける。
5. 使用言語は、日本語もしくはフランス語とする。
6. 論文の分量は、本文、注を含めて日本語の場合は 16,000 字以内、フランス語の場合は、A4 版 15 枚（4,800 語）以内を原則とする。他のジャンルの分量については、編集委員会に事前に問い合わせられたい。
7. 投稿原稿は、Microsoft Word 形式の添付ファイルで支部事務局に送る。締め切りは、支部大会の翌年の 1 月末とする。
8. 原稿の採否、掲載時期は、査読を経て編集委員会が決定する。
9. 雑誌は、日本フランス語フランス文学会東北支部会ホームページ上での刊行を原則とするが、適宜冊子体での刊行も行う。
10. 冊子体での刊行においては、原稿執筆者に本体 10 部、また抜き刷り 30 部を贈呈する。

(2010 年 11 月 13 日開催の支部総会にて一部改訂)

Nord-Est

Bulletin de la Société Japonaise de Langue et Littérature Françaises du Tohoku, n° 5.

日本フランス語フランス文学会東北支部会報 第5号

編集責任者／今井 勉

編集委員／大谷尚文，後藤尚人，林 修，森田直子

2012年4月10日発行

発行者／日本フランス語フランス文学会東北支部

<http://genesis.hss.iwate-u.ac.jp/sjllf-tohoku/>

支部事務局への問い合わせ等は，上記ホームページの「ご意見&ご要望」ページをご利用
ください



フランス政府公式フランス文化・語学教育機関

Alliance Française



Association franco-japonaise



Liberté • Égalité • Fraternité
RÉPUBLIQUE FRANÇAISE

仙台日仏協会・ アリアンス・フランセーズ

Centre officiel de langue et de culture française
Association franco-japonaise - Alliance française de Sendai

フランス文化

Événements culturels

Médiathèque

フランス語

Cours de français

法定翻訳・通訳

Traductions certifiées

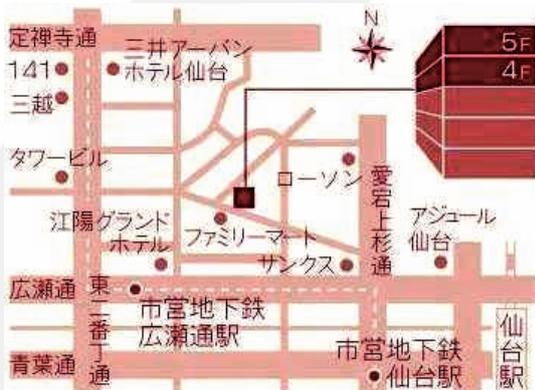
Interprétariat

フランス語試験

DELFF/DALF/TCF

SENDAI

様々なレベルに対応した安心・丁寧なフランス語講座、フランスを楽しむ文化イベント、各種翻訳・通訳やフランス語試験を「東北のフランス」として展開しています。各教育機関・団体等への講師派遣も承っております。東北唯一のフランス政府公式機関アリアンス・フランセーズへおまかせください！



Venez découvrir la culture et la langue française dans la bonne humeur, quelque soit votre niveau !

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町二丁目8-10-4F・5F

TEL:022-225-1475 FAX:022-225-1407

Mél: contact@alliancefrancaise-sendai.org

HP: <http://alliancefrancaise-sendai.org>

